上毛新聞

平成１６年（２００４年）
８月２４日（火）
上毛新聞社　前橋市古市町 1-50-21
電話 027-254-9937

athens2004
電子速報
http://www.raijin.com/

吉田が金メダル

国際試合で無敗

五輪代表が夢に終わった父親の願いを背負い、電光石火の〝走るタックル〟がさく裂した。女子５５キロ級決勝。外国人選手に無敗の吉田が、父親の栄勝さんがたたき込んだ「黄金の左」で五輪を制した。

吉田の特徴は異色の左構えからの攻撃だ。右脚が前に出ている右構えが圧倒的に多い中で「左を制する者は世界を制す」と栄勝さん。右利きのまな娘を強制的に少数派の左構えで育て、相手にやりにくさを与えてきた。

「脚に触ればポイントにつなげる自信はある」と吉田はいう。軽々と後方宙返りをこなす抜群の身体能力で、五輪代表を争った山本聖子（ジャパンビバレッジ）の強固な防御を破った。

女子５５キロ級で金メダルを獲得し、日の丸を掲げて喜ぶ吉田沙保里選手＝アノリオシア・ホール（共同）

自宅にマットを敷いた約二十二畳の道場でタックルの練習を積んだ。「胸がつくくらいまで懐に入ったら、持ち上げるように走って前に出ろ。止まったら外国人のパワーに負けるぞ」。元全日本王者の栄勝さんは相手が嫌がるタックルを徹底した。

兄２人の後を追い、３歳でスタートしたレスラー人生。一度はやめることも考えた。中京女大に入り、寮生活で上下関係に戸惑い、「帰りたい」と何度も泣いた。

その中で吉田は欠けていた気持ちの強さを身につけた。「父からはタックルを教わり、中京女大に来て精神力も体力も付いた。全部が重なって強くなれた」

レスリングを始めて二十年目。「北京五輪で連覇を目指したい」。心技体の穴がなくなった２１歳の挑戦は終わらない。（共同＝奥出裕充）

Copyright©2004 THE JOMO SHINBUN